

九世紀の津軽エミシと逃亡民

鐘 江 宏 之

はじめに

九世紀後半に起こった東北最大の蝦夷の反乱とされる元慶の乱は、秋田城下のエミシによる秋田城襲撃に端を発したが、乱の推移の中で、津軽や渡嶋のエミシの動向が乱の展開を左右した。『日本三代実録』に知られる一連の記事の中では、津軽エミシの勢力が反乱軍に荷担することを、政府軍側が非常に恐れていたことが知られる。このことにも端的に窺われるように、九世紀後半段階で、津軽地方のエミシは大きな勢力を持つに至っていたことが認められる。⁽¹⁾

近年、津軽地方における発掘調査が進んだ結果、平安時代前期から中期にかけての様相が、じよじよに明らかになりつつある。これらの研究成果によれば、津軽地方は九世紀になると、七世紀・八世紀の段階とは違った様相を見せるようになったことがわかってきた。八世紀段階までは集落の分布も多くは知られないが、九世紀になると集落の数も増え、爆発的に人口が増えるようになったと推測される。⁽²⁾

こうした考古学の研究成果を受け止め、より理解を深めていくために、既知の文献史料から九世紀の津軽エミシの様相をどのようにとらえられ

るのかという問題について、現段階で再整理する必要があると考える。近年の研究成果として、簗島栄紀による地域間交流に着目した成果は、こうした問題意識からみて特筆すべきものであるが、その見解に対してさらに付加すべき要素もあると思われる。

なお、すでに叙述に使ってきたが、本稿では「エミシ」という表記を用いる。九世紀の史料上では、津軽や渡嶋のエミシに対して「狄」「狄俘」といった表記をとることが多い。これの裏返しとして、「夷」という表記は奥羽山脈の東側の人々に対してなされることが多く、当時の政府によるそうした方位認識的呼び分けに関係なく、国家の外に位置づけられた「夷」「狄」の両方を含めたものとして、「エミシ」という表記を用いることにする。本稿を記すにあたって、表記と概念を弁別するため意図であることをご了解願いたい。

一 七～八世紀の津軽エミシとその評価

津軽エミシが史上に登場するのは、七世紀半ばに溯る。斉明天皇元年（六五五）には、難波の宮廷でエミシに対する饗応が行われ、その際に

「柵養蝦夷」と「津茹蝦夷」に冠位が授けられたことが知られる。⁴⁾「つがる」(あるいは「つかる」と読む可能性もあるだろう。)の地名の初見である。この数年後に行われた阿倍比羅夫による北方遠征では、津軽地方のエミシが、政府軍を迎える拠点として積極的に役割を果たしたと考えられている。『日本書紀』では、このときに「淳代郡」「津軽郡」(内実は不明ながら、「郡」という表記は七世紀半ばでは想定しがたく、「評」であった可能性を考えるべきか。)の郡領を定めた⁵⁾と記しているが、斉明天皇四年(六五八)に朝貢した「淳代郡」の郡領と「津軽郡」の郡領⁶⁾とは、「津軽郡」のほうが高い冠位を授けられていたことが知られる。こうした状況からは、当時、津軽エミシの集団は積極的に政府と結び、政府からは淳代や渡嶋のエミシよりも高い位置づけを与えられていたと考えられる。さらにこのことに関連しては、『日本書紀』斉明天皇五年(六五九)七月戊寅条所引の伊吉連博徳書に、遣唐使が連れて行ったエミシを唐の皇帝高宗に対して披露しながら、エミシの種類を「熱蝦夷」「匱蝦夷」「都加留」と分けて説明したことも知られる。エミシに対する三分の一として津軽が位置づけられていることは、エミシ世界の中での津軽の地位を政府が重く扱っていたことの反映であろう。また、政府にとって最も遠い区分でありながら、「熱蝦夷」や「匱蝦夷」といったさまざまな集団を包摂するような呼称でなく、固有の地名による呼称となっており、そのことから政府に強く意識された集団であったということができらるだろう。

以上のように、七世紀半ばには、政府による北方経営のための重要拠点として、津軽エミシが評価されていた。この位置づけは、おそらく八

世紀初頭あたりまでは残されていくのであろう。『続日本紀』養老四年(七二〇)正月丙子条に知られる「渡嶋津軽津司」は、その機能や設置された場所すら確定しがたいものの、津軽の勢力に対する七世紀半ば以来の評価があつてはじめて、こうした名称の職が設定され得たとみることができらるだろう。八世紀に入っても、津軽エミシと政府との交流は続いていたことは間違いない。⁷⁾

このように七世紀半ばから八世紀初頭にかけては、津軽エミシに対する政府の高い認識を窺わせる史料がいくつか知られるのだが、その後九十年以上もの間、津軽エミシについての情報はまったく知られなくなってしまう。政府の北方経営における重視の度合いから考えれば、七世紀半ばから八世紀初頭にかけての津軽エミシの勢力は、控えめに想定しても、周辺に比べて遜色ない政治力を持てる集団であつたと評価すべきであらう。そうした集団の存在は、九世紀に大勢力として知られる津軽エミシと、何らかの形で継続性を持つていてのではないかと考えたくなる。

しかし、発掘調査の成果では、八世紀までの段階では、九世紀以降の集落の展開に比べて、さほど大きな勢力を想定できる論拠は見つかっていない。このことを踏まえると、文献史学にとって、この九十年間の空白期間をどのようにとらえるべきかという点も、意味のある課題としなければならぬだろう。九世紀にあらわれる津軽エミシと七世紀半ばの津軽エミシとを、同一範囲の勢力として考えてよいのかどうか、あらためて考え直してみることも必要かも知れない。しかも、このことは、場合によっては、「津軽」と呼ばれる地域をどのような広さで考えるのかという問題にも関わってくるだろう。現段階でこれらの問題に対する断

案を持ち合わせてはいないが、考古学から提示されている八世紀から九世紀への状況の変化という要素に対して、文献史学が史料の中に何かを見つけ出すことができるのかどうか、何らかの変化の要素を読みとることを試してみなければならないと思われるのである。本稿では、このことを考えていくために、当面は九世紀の状況を主に分析して課題に迫ることに徹してみたい。

二 九世紀の津軽エミシ

九世紀に入ってから津軽エミシの動向が知られる最初の史料は、次に掲げる『日本後紀』弘仁五年（八一五）十一月己丑条の記事である。

陸奥国言。胆沢・徳丹二城、遠去^ニ国府、孤^ニ居塞表^一。城下及津軽狄俘、野心難測。至^ニ於非常、不^レ可^レ不^レ備。伏望、予備^ニ糒塩^一、収^ニ置両城^一者。許^レ之。

胆沢城と徳丹城によって管轄される北上盆地は、延暦年間後半になってようやく政府がエミシを従えるに至った地方であり、弘仁二年（八一五）正月には和我・菟縫・斯波の三郡が設置されるまでに至った。しかし、爾薩体村エミシを中心とした北部の反抗勢力に対して同年二月から計画された征討を経て、同年末には征夷將軍文室綿麻呂の申請によって志波城が移転し、徳丹城に前線が後退した。こうした状況から考えると決して安定した支配が確立したわけではなかった。ここで「城下」の狄俘とされたのは、胆沢城・徳丹城の支配下にあった俘囚たちであり、これといっしょに「津軽」の狄俘が、「野心難測」として警戒対象に挙げ

られている。津軽エミシの勢力が、すでにこの時点で警戒すべきものとされていたことは、後述するような元慶の乱における政府の恐れに共通するものがある。九世紀前半のこの時点で、陸奥国側が津軽エミシに恐れを持ったことの意義として、以下の二つの点に注目しておかなければならない。

第一は、七世紀半ばに政府に協力して高い評価を与えられていた津軽エミシが、この時点では政府に協力する者としては位置づけられていないことである。その動向は明瞭には把握できないが、政府側から警戒を抱かせるような何らかの要因があったことは事実であろう。もちろん、九十年ほどの長い間には、エミシ世界での指導者の世代も代わり、政府の政策も変化しているだろう。しかし、これほどの長期間にはさまざまな変化が起こりうるので無理もないというような漠然とした見方では、考察は進まない。後ほどこの変化の要因を九十年間に起きた諸条件の変化のうちに考えることにしたいが、まず政府からの評価が変わっていることを一つの指標として確認しておくことにしたい。

第二に、「津軽」の狄俘が、「城下」の狄俘と併記される扱いを受けていることである。この記事は陸奥国司からの奏上によるものだが、陸奥国内の支配機構である徳丹城の配下には、津軽エミシは含まれていないと考えてよいだろう。また、もし出羽国の支配機構である秋田城や雄勝城の配下にあった場合には、徳丹城下と併記するならば秋田城下や雄勝城下のエミシとされるべきで、このように「津軽」が「城下」でない扱いで取り上げられる可能性は少ないと考えられる。すなわち、津軽エミシは、陸奥国最北の徳丹城支配下に取り込まれておらず、また出羽国最

北の秋田城支配下にも取り込まれておらず、それらの地域より一線を描いて扱われているとみてよいだろう。このことは、城柵支配の中に直接的に取り込まれてはいないことを示すが、その一方で、城柵支配下の地域と比較的近くに接しているという微妙な条件が、城柵支配の展開の中で何らかの影響を被ることを予想させる。この点についても、後にあらためて触れることにしたい。

弘仁年間の後に津軽エミシが登場するのは、元慶二年（八七八）に起きた元慶の乱関係の史料においてである。以下に、関係史料を掲げながら、見解をまとめておくことにしたい。

① 『日本三代実録』元慶二年（八七八）七月十日癸卯条

出羽国飛駅奏曰、（中略）或云、津軽地夷狄或同、或不_レ同。若不_レ同者、以_レ上野国軍、将_レ得_レ討滅。遂同者、雖_レ大兵難_レ可_レ輒制_レ。（中略）津軽夷俘、其党多_レ種、不知_レ幾千人。天性勇壯、常事_レ習戰。若速_レ逆賊、其鋒難_レ当。請_レ常陸・武藏両国軍合_二千人_一、以_レ誠_レ備非常。是日、勅符曰、（中略）亦来奏以_レ為、津軽夷魯、天性兇獷、若速_レ凶類、実為_レ難_レ制。塞下流言、南北異口、或云既同、或云未_レ同。請_レ發_レ常陸・武藏等国兵、備_レ其非常出_レ於不意。今如_レ奏狀、同否未_レ審。若果不_レ同者、所_レ率見兵可_レ得_レ摧破_レ。（後略）

①では、津軽エミシの動向が、乱の行方を左右するものとして、政府軍から恐れられている。かなりの勢力を保持した津軽エミシは、勇壯で戦闘に慣れた人々と認識されており、出羽国での考えでは、彼らが反乱軍側についた場合にはかなりの苦戦が予想されることを述べている。か

りの人口を有した勢力とみられていたことは間違いない。この記事の中で、「津軽夷俘、其党多_レ種、不知_レ幾千人。」とされている点からは、その大勢力とされた津軽エミシが、多様な人々から構成されていることが推測される。おそらくかなり広範な地域に居住する人々を、まとめて「津軽夷俘」としているのであり、それらの津軽エミシの人々が一体となつて行動した場合には大変な脅威となるが、実際には多様な集団が別々に行動する可能性も、当初から考えられてはいただろう。

② 『日本三代実録』元慶二年九月五日丁酉条

勅符出羽国司曰、（中略）且津軽・渡嶋俘囚等所_レ請之事、以_レ夷撃_レ夷、古之上計。但野心難_レ馴、動靜易_レ變。偶生_レ他意、後恐難_レ制。宜_レ量_レ事勢_レ随_レ便進止_レ。（後略）

③ 『日本三代実録』元慶三年（八七九）正月十一日辛丑条

是日、出羽国飛駅奏言、去年十二月十日、凶賊悔_レ返噬之過、致_レ束手之請。便返_レ進所_レ掠奪_レ之甲廿_二領_一。言曰、所_レ取甲冑、其数不_レ少。任_レ己_レ狂心、皆悉截破、称_レ身約裁、一无_レ全者。加之賊類或入_レ奥地、或所_レ居隔遠。其遣甲冑搜求追進。（中略）又渡嶋夷首百三人、率_レ種類_二三千人_一、詣_レ秋田城。与_レ津軽俘囚不_レ連_レ賊者百余人、同共_レ婦_レ慕聖化。若不_レ勞賜、恐生_レ怨恨。由_レ是、遣_レ從五位下行権介藤原朝臣統行・從五位下行権掾文室真人有房及令望・滋実・貞額等_二勞饗_一。

②では、津軽エミシと渡嶋エミシが政府軍側について、反乱軍を攻撃することを申し出たことが窺われる。さらに、反乱が鎮圧された後の③では、津軽エミシのうち反乱軍に与しなかった百数人が、渡嶋エミシの

三千人以上とともに秋田城に参上して饗宴に参加している。元慶の乱に関する史料を詳細に検討した熊田亮介氏の見解によれば、津軽エミシの多くは反乱軍に加わっており、一部寝返った者が乱の収束後に饗応を受けた百数名とされる。熊田氏の見解では、当初は反乱軍に与していた中から、一部の津軽エミシが政府軍に寝返ったとの解釈を示しているが、

この点はおおきく考究すべき余地がある。当初から反乱軍に与していた津軽エミシと、当初は帰趨が定まらず、途中から渡嶋エミシとともに政府軍に与することにした津軽エミシがいたことも、十分に考えられるだろう。先に、津軽エミシとして想定される人々は広範な地域を含み、多様な集団から構成されるのではないかという見通しを述べたが、そうであれば、当初から津軽エミシがすべて反乱軍に加わっていたとする理解が絶対のものというわけではない。

④ 『日本三代実録』元慶三年三月二日壬辰条

正五位下守右中弁兼行出羽權守藤原朝臣保則飛駟奏言曰、臣保則等、謹須依去正月十三日勅符旨早討虜。而行事相違、不能進止。何者、臣等所賜諸国之兵千八百余人。上野・下野両国各八百人。陸奥国追還散卒二百人是也。以此輩、且擊破奥賊之士卒、且討平近城之反虜。次須重請諸国之兵攻伐奥賊。〔中略〕国内黎氓、苦来苛政、三分之一、逃入奥地。所遺之民、承数年之弊、无自存之方。况軍興以来、運轉軍糧、去今兩年少時不休息、无用之卒、騷動部内、待救之处、還致巨害。〔中略〕今重請大兵、將討降虜、国弊民窮、難可克堪。若慰撫部内之窮卒、驗出奥地之逃民、留中国之甲冑、選当土之例兵、降虜

雖反、不可足畏。〔後略〕

⑤ 『日本三代実録』元慶四年（八八〇）二月十七日辛丑条

是日、正五位下守右中弁兼行出羽權守藤原朝臣保則飛駟奏曰、降虜所進掠取甲六十六領、冑卅二枚、大刀四枚、鉾一柄、箭一十隻。賊夷去年進契狀曰、所遺甲冑、早速將進。而踰涉年月、未_レ有_レ返上。故遣權大目正六位上春海連奥雄、入奥地所勘取也。〔中略〕又夷俘賜饗之日、多以他死亡位記、自称其姓名、貪預賜祿。奥雄責取死亡位記一百六枚。

④と⑤には「奥賊」「奥地」という表記が見られ、この点についても熊田氏が言及している。その結論としては、秋田城下の外とされる津軽の地を「奥地」と考えることができ、「奥賊」は反乱軍に加わった津軽エミシとみることができる。詳細は熊田氏の論考を参照されたいが、少なくとも元慶の乱に関する一連の記事に限っては、「奥地」とされる範疇に津軽地方を入れることには問題はないだろう。秋田城下で反乱軍を構成した秋田城以北の十二村の地が「奥地」に含まれないと言い切れるのかどうか、その点にはまだ検討の余地があるものの、津軽エミシの大部分が反乱軍に参加していることからすると、「奥賊」を広く考えたとしても、津軽エミシがかなりの割合を占めることになると思われる。⑤に見られるように、この「奥地」から多数の位記が回収された点については、簗島栄紀氏は、津軽エミシの中に交易などを媒介として王臣家や国司と結んで台頭した階層がいたとする見解を示している^⑩。

こうした「奥地」に関する記述の中で、本稿で最も着目しておきたいのが、④の「国内黎氓、苦来苛政、三分之一、逃入奥地。」という

部分である。熊田氏も「三分之一」には誇張があるが、数十数百の単位ではあるまい。」と述べているように、出羽国内人口の三分の一とするのは、誇張表現とみてよいだろうが、苛政のために「奥地」に逃亡した人々が相当数にのぼることは、出羽国では知られていたようである。出羽国内から城柵支配の外側にある津軽地方へ人々が逃亡し、それがかなりの数にのぼったとみられるのである。このことは、津軽エミシについて考えていく上で非常に重要な問題であり、節をあらためて述べていくことにしたい。

⑥ 『藤原保則伝』

(前略) 公即発使者、撫佃余種。自津軽至渡嶋、雑種夷人、前代未嘗帰附者、皆尽内属。(後略)

この記述では、元慶の乱平定後に津軽エミシと渡嶋エミシが秋田城に「帰附」するようになったとしている。「帰附」の指すところはあまいであり、藤原保則の個人的な業績をたたえるための誇張でもあるが、元慶の乱以前においては、津軽エミシも渡嶋エミシも秋田城下には含まれていなかったことを前提とした記述である。このことは、津軽エミシが、やはり国家権力の外側の存在として認識されていたことを物語っている。また、「雑種夷人」とされている点は、津軽エミシが多様な人々から構成されていたことを踏まえて理解できる表現である。

⑦ 『日本紀略』寛平五年(八九三)閏五月十五日壬午条

出羽国渡嶋狄与奥地俘囚等、依欲致戦闘之奏状、仰国宰、令警固城塞、選練軍士。

元慶の乱から十五年しか経ていないが、渡嶋エミシと「奥地俘囚」と

の間で、戦闘が起こりそうな状況になっていることがわかる。この「奥地」も津軽地方を含むとみてよいと考えられ、あるいは元慶の乱の余波がまだ残り、政府軍に与した渡嶋エミシと反乱軍に与した津軽エミシとの間の抗争が続いていたのであろうか。

以上、九世紀の史料に知られる津軽エミシについて、史料ごとの見解をまとめてみた。熊田氏によつて、「奥地」は津軽地方を指すことが提起され、この点については少なくとも「奥地」に津軽地方が含まれることは確実に考えてよいと思われる。そのことからすると、「奥地」に多くの人々が逃げ入ったことを、元慶の乱以前の九世紀段階での史実として、あらためて取り上げていかなければならないだろう。次節では、津軽地方への逃亡民の流入の問題について考察を進めることにしたい。

三 津軽地方への逃亡民の流入

元慶の乱以前に多くの人々が「奥地」に逃亡した原因としては、前掲の史料④において、出羽国内の苛政が要因として挙げられていた。このことについては、『藤原保則伝』においても、「如聞、秋田城司良岑近者、聚斂無厭、徵求万端。故置怨積、怒致叛逆」。夷種衆多、通相合従、賊徒数万、窮寇死戦、一以当百、難与争鋒。」と見えて、秋田城司の良岑近が苛斂誅求を行ったことが、エミシの反乱に至る主な原因として描かれている。ただし、史料④で見たように、『日本三代実録』では出羽国内の三分の一が奥地に逃亡したとして記されており、苛斂誅求の対象はエミシだけでは限らないだろう。『日本三代実録』の表

記からすれば、出羽国内の百姓が相当数逃亡していることが推測できるだろう。

その中でも、秋田城司の苛政が、伝えられるように特に厳しいものであったのならば、秋田城下における百姓とエミシの両方が、堪えきれずに逃亡していった考えることができよう。出羽国内は百姓とエミシの雑居の地であり、秋田城周辺も百姓とエミシからなる社会であった。『続日本紀』宝龜十一年（七八〇）八月乙卯条には次のように見える。

出羽国鎮狄將軍安倍朝臣家麻呂等言、狄志良須・俘囚宇奈古等歎曰、己等抛「憑官威」、久居「城下」。（中略）當時之議、依「治河辺」。然今積以「歳月」、尚未「移徙」。以此言之、百姓重「遷明矣」。宜「存此情」、歷「問狄俘并百姓等」、具言「彼此利害」。

この史料は、宝龜年間に秋田城の停廃問題が議論された際の記事だが、秋田城下に国家の權威を頼って居住している「狄」がいたことがわかり、また末尾で「狄俘并百姓等」に質問して広く意見分布を調査するよう指示が出されている。秋田城周辺に百姓とエミシとが居住していたことを推測させる。

こうした城下の百姓は、出羽国の場合、もともと城柵設置以前から居住していた人々を取り込んだだけでなく、柵戸として他国から移ってきた人々も含まれていた。他国から移住した柵戸については、八世紀半ばを境に、様相が変化することが指摘されている。¹⁴ 希望者による移住だけでなく、八世紀後半からは犯罪者などの強制移住のケースが増えていくのであり、八世紀後半から九世紀にかけて彼らに対する苛政が行われた場合に、八世紀前半までよりも逃亡の度合いがより多くなる可能性はあ

るだろう。柵戸の人々は、他国での生活方法を一部保持したまま生活を続けていた可能性もあり、そうした状態のまま奥地に逃亡すれば、エミシたちの生活の中に、新しく異文化を持ち込む存在となった可能性がある。

史料④に知られる逃亡の様相は、出羽国内の百姓の逃亡が多かったことを示しているように見えるが、その一方で、エミシ集団も苛政を逃れて移住していった可能性があるだろう。ことに秋田城司の良岑近による苛政がエミシ反乱の原因となったとすれば、秋田城の配下にあったエミシの村からは、逃亡する者がかなり見られたことは想像に難くない。

『日本三代実録』元慶二年（八七八）七月十日癸卯条では、「又秋田城下賊地者、上津野・火内・楡淵・野代・河北・腋本・方口・大河・堤・姉刀・方上・焼岡十二村也。向「化俘地者、添河・霸別・助川三村也。」として秋田城支配下にあった「城下」のエミシのうち、秋田城よりもいずれも北側に比定される十二の村から、¹⁵ 反乱軍が構成されていることが知られ、これらの十二村に対する苛政があったことが考えられる。秋田城では城下のエミシが反乱を起こしたと認識しており、秋田城側からはエミシに対する政策と反乱との間に因果関係をみていたのだろう。これに加えて、この段階では動向が不明確であった津軽エミシの大部分が加わって反乱軍の総体となっていたのであるが、城下とされたのが、米代川流域までの範囲であり、その北側の津軽地方には秋田城の支配が米代川流域ほどには及んでいなかったとみられる。この支配の度合いの差が、当時の津軽地方を考える上で重要な条件となるだろう。この点は、次節で述べることにする。

城下にあるか、その外側にあるかという区分は、秋田城側による人為的な区別でしかなく、秋田城下のエミシの村にとつては、その北側の津軽エミシとの間には当然交流があつたはずである。十二村の中で、津軽エミシと交流が密であつた地域もあつたことが十分に考えられるのである。そうした交流を前提として、津軽エミシが大量に反乱軍に与したという事実も理解できるだろう。また、十二村が秋田城司による苛政から反乱を起こすに至つたのであれば、苛政を避けて城下から逃亡したエミシもいたことが、推測される。そうした人々が逃れる先としては、すぐ近くにありながら城下の扱いではない津軽地方が、まず念頭におかれるべきだろう。このように考えると、津軽地方への秋田城下からのエミシの流入がかなりあり、そうした関係があつたことが、津軽エミシが反乱軍に参画していった大きな要因であるように思われる。

簗島栄紀氏は、元慶の乱の前提として、交易を通して国家との関係を維持してきた津軽エミシ集団が、秋田城の設置以後に渡嶋エミシと国家側との直接交易が可能になつたことなどにより存立基盤を揺るがされ、本州と北海道との間の交易を活性化しその仲介者としての位置を回復することを望んでいたとする理解を提示している。¹⁶⁾ この交易の実態と津軽エミシ勢力との関係について、詳細な検討は別の機会に譲ることとしたいが、津軽地方の立地条件からみて、一つの要因としてこうした交易条件の変化があることは認められると思われる。しかし、元慶の乱の背景として、津軽エミシが反乱軍に与した要因はそれだけではないだろう。隣接する城下地域との関係についても、ここまで述べてきたように、人々の逃亡・移住の可能性を考慮していく必要があるように思われる。

エミシとして位置づけられた中には、さまざまな人々が含まれる。七世紀以来、「蝦夷」という呼称は、政治的な位置づけとして設定されてきたのであり、政府の支配下には未属で、今後政治的教化によつて支配下に組み込まれることが期待される人々としての位置づけでしかなかった。エミシとして扱われた中にも、例えば『日本後紀』延暦十八年（七九九）三月壬子条に「停_レ出羽国山夷_二山夷_一・田夷_一、簡_二有功者_一賜焉。」と見えるように、「山夷」「田夷」と呼ばれた人々など、さまざまな生活形態を持つ人々が包含されていた。生活形態や人種的問題は、エミシかエミシでないかという区分にとつては、第一義ではなかつたのである。

エミシ居住地として認識された地方には、どのような人々が雑居していたのかという点について、国家が居住者を丸ごとエミシと位置づけた史料からでは、その実態を窺い知することは難しい。津軽地方はまさにこうした地方の典型であり、津軽エミシの実態としては、多様な人々が内包されていたと理解する余地が残されている。七世紀以来数世代に渡つて津軽地方に居住してきた一族もいれば、その後に他の地方から移住してきた人々もいたであろう。そして移住者の中には、秋田城支配下の地域からの百姓もいれば、城下でエミシと位置づけられていた人々も含まれていたであろう。九世紀の津軽地方には、このように多様な人々が流入していき、人口の拡大をみたと考えられる。

このような人口流入を、秋田城下からだけのものと考えする必要もない。例えば、弘仁二年の爾薩体村エミシ等への征討との関係でも、征討対象とされたエミシの人々の動向が注目される。『日本後紀』弘仁二年七月

辛酉条では、次のように記されている。

出羽国奏、邑良志閉村降俘吉弥侯部都留岐申云、己等与武薩体村夷伊加古等、久構仇怨。今伊加古等、練兵整衆、居都母村。誘弊伊村夷、將伐己等。伏請兵糧、先登襲擊者。(後略)

この時点で爾薩体(武薩体)村の伊加古らは、都母村に身を寄せながら邑良志閉村襲撃の機会をうかがっていた。爾薩体村のエミシは、前年の冬から同年春にかけての時期に、出羽守大伴今人の率いる政府側についた俘囚軍に攻撃され、本拠地の爾薩体村を離れて体制の立て直しをはかっていた。抗争の中で拠点を移して体制の立て直しをはかったのであり、戦いのたびに、このように拠点を移すエミシ集団も出てくると考えられる。

その後の同年十月ごろ、爾薩体村と同盟関係にあった閉伊村が政府軍によって攻撃され、多くの閉伊村エミシが降伏したり捕らえられた。閉伊村のエミシの中には、どこか他の地へ逃げた者もいたかもしれないし、また同盟関係にあった爾薩体村や都母村のエミシもその後どうなったかは不明である。この際の戦闘を逃れたり、あるいは敗走した者たちが西へ逃げたならば、あるいは津軽の地へ流入していくことも十分に考えられる。現に、前節で触れたように、それからほどない弘仁五年(八一四)十一月の段階で、胆沢城・徳丹城の城下とともに、津軽エミシが「野心難測。至於非常、不可不備。」とされていることは、弘仁二年の爾薩体村・閉伊村などへの政府軍の攻撃によって、これら二村や都母村などの地域からの逃亡者が津軽地方に流入し、なお政府側へ反抗する可能性を秘めていたことによるのではないだろうか。

以上に述べてきたように、九世紀の東北地方北部における苛政や戦乱の中で、津軽地方に多様な人々が流入していった可能性を見出すことができる。こうした人口移動の結果として、政府側からは、津軽エミシの勢力が雑多でありながらも、大きな勢力を有していることが漠然と認識されるようになっていったと考えられる。

四 城柵のエミシ支配と城下・津軽

前節では、九世紀の津軽エミシの社会に、他地域からの多くの逃亡民が流入していた可能性について述べた。津軽地方における八世紀前半までとの違いの一つとして、こうした人口移動による社会の変化と政治的影響を指摘することができないかと思われる。では、こうした現象の契機として、どのような構造を考えればよいだろうか。その鍵になるのは、やはり政府側によって設置された城柵とその機構による政治支配の影響である。このことについて、より具体的に整理を試みてみることにしたい。

元慶の乱の要因として秋田城司の苛政が問題になっていたように、秋田城による柵戸支配やエミシ支配は、支配下に直接の影響を及ぼした。その支配下にあたるものが、「城下」とされた地域であると考えられる。秋田城下のエミシ村は、前節で触れた『日本三代実録』元慶二年七月十日癸卯条における村名の分布からすると、南は秋田城より若干南の雄物川下流域から、北は米代川流域にまで広がり、河口から溯って現秋田県域の北東隅にあたる鹿角盆地まで含まれることが知られる。津軽地方は

この範囲の外側にあり、秋田城下の外側として扱われていた。城下に入っている地域は、秋田城司によつて、エミシであっても何らかの苛政による搾取の対象となっていたのであろう。そうでなければ、政府側における反乱軍についての情報分析の際に、これほど明瞭に城下と津軽とで情報量の差が出ることはないだろう。米代川流域までは村単位での把握がなされていたのに対して、津軽地方については不明確な情報しかなく、また広範な地域を村単位でなく「津軽」と一括して呼ぶことしかできていなかったのである。このような状況からみて、城下とその外側との間には、秋田城司からの政治支配に大きな差違を認めなければならないだろう。

元慶の乱の展開過程においては、米代川流域のエミシの村はこぞつて反乱軍に与したが、津軽エミシの諸集団の場合には政府軍側につくものもあった。この動向の違いが何に起因するかとなれば、やはり城下にあったか、そうでなかったかという違いが第一義であると考えられ、これを抜きにしては津軽エミシの動向の複雑さを考えることはできないだろう。城下かその外側かという違いは、秋田城側から設定された人為的な区別でしかなかった。現実に生活している人々が、米代川流域と津軽地方とで、どれほどの相違を持っているのかといえ、未解明の部分も多いが、まったくの異文化というようなほどの違いを認めることはできないだろう。しかし、城下かそうでないかという差は、政治的には大きな違いとして現れることになったのである。

先に述べたように、秋田城下に取り込まれなかったことが、津軽地方への人々の流入を導いたと考えられる。こうした意味で、秋田城の出現

が、間接的に津軽地方に影響を与えたということができるだろう。秋田城の成立は、天平五年（七三三）に出羽柵を秋田村高清水岡に遷したことに始まり、近年の研究では、天平宝字年間に大規模に整備されることによつて充実したとする見方もある。²⁰ いずれにせよ、秋田城の創始や充実の時期は、第一節で触れた九十年間あまりの空白の期間に位置している。この時期の秋田城による城柵支配の開始によつて、津軽エミシが間接的に影響を受けていくのであれば、九十年間における最大の変化として、秋田城支配の出現という条件の変化を重視しなければならないだろう。

簗島栄紀氏は、交易の問題からのアプローチにおいて、交易拠点としての秋田城の出現によつて、渡嶋エミシからの物流が直接に秋田城にもたらされるようになったため、交易を介して勢力を得ていた津軽エミシへの影響が大であったと説いた。このことも、たしかに重要な要因として、秋田城出現の影響として考えていかなければならない。しかし、秋田城による城下支配地域の設置という政策もまた、間接的に津軽地方への影響をもたらしたことになる。城下からの逃亡の問題を考えても、けつして小さい評価で済ませるわけにはいかないだろう。

また、別稿で指摘したように、弘仁二年（八一）の爾薩体村方面への軍事行動が、出羽国側を拠点として発兵されたものであったならば、太平洋側をも含む東北北部全体への影響力という点で、秋田城の出現にさらに大きな評価を与えなければならないことになる。この場合、現秋田県北部から現岩手県北部にかけての地域で、秋田城の勢力が影響を持つていくとみる中で、津軽地方の位置づけをあらためて考えてみなければ

ばならないだろう。秋田城による政治支配が米代川流域に影響を与えていく中で、交流・流動する人々の実態と、生活文化などのさまざまな要素の展開を、東北北部の広範な範囲で検証していかなければならないが、この点は現在の私の力量に余るところでもあり、今後の課題としたい。

おわりに — 元慶の乱後に関して —

津軽地方における七～九世紀について、発掘調査成果の現状をどう評価するのは、難しい問題である。八世紀の様相でまだ見つかっていない部分が多いだけなのか、それとも九世紀になって八世紀とはまったく違った規模で津軽エミシの勢力が展開したと断言できるのか。そのことを見極めるためには、もう少し発掘調査の進展を見た上で考えてみたいというのが、現段階での希望である。しかしながら、それとは別個に文献史料を考察する中で、八世紀と九世紀との間の諸要素の違いを指摘しておくことも重要である。結果として、本稿では政府支配下からエミシ社会への逃亡という問題を、そうした要素の一つとして位置づけることができたのではないかと考える。

また、元慶の乱に至るまでの考え方の方向性については本稿で述べてきたが、元慶の乱後に津軽地方がどのように位置づけられていくのかも興味深い問題である。史料的には極めて少ないが、『日本紀略』寛平五年（八九三）閏五月十五日条に「渡嶋狄」と「奥地俘囚」が抗争している（第二節、史料⑦）と記されている点からすれば、「奥地」の表現に窺われるように、依然として津軽全体を一括りでとらえているように見

え、村単位のような綿密な把握は行われてはいなかったのではないだろうか。

この時期に注目される考古学上の問題として、五所川原須恵器窯の創業がある。現段階での考古学的成果からは、九世紀の後半に活動の開始を求められるとされている。⁽²⁾ 従来、能代市の十二林窯よりも後に活動を開始するとされてきたが、近年の発掘調査の成果によって、その前後関係は微妙なものになった。能代からの技術伝播と単純に考えるわけにもいかないようである。さらに、九世紀後半という時期は、その創始が元慶の乱の前からなのか、直後からなのかという違いによって、窯の創業者の意味合いが変わってくる。元慶の乱以前に須恵器の技術が津軽エミシの社会に流入したのか、それとも元慶の乱によって津軽エミシの大部分が敗北した後に須恵器の技術が流入したのか、それぞれの見解によって、須恵器生産の持つ意味合いの評価はまったく変わってくるのである。現段階では、この問題の考察に一定の方向性を与えるには材料が少なすぎるため、今後の研究の深化を待つことにしたい。

本稿では、文献史料の上で決して豊富とは言えない津軽エミシ社会の動向について言及してみた。推測に頼る部分も多岐にわたり、なお考察を深める必要のある点が多いが、現段階での識者のご批評を乞う次第である。

註

- (1) すでに、新野直吉「古代史上の津軽」(『弘前大学国史研究』七〇、一九八〇年四月)など、多くの論考でも触れられている。
- (2) たとえば『新編弘前市史』資料編1(考古編)第三章 古代(三浦圭介氏執筆)(一九九五年一月)、工藤清泰「考古学研究における境界性」(『青森県史研究』一、一九九七年三月)などが、多くの成果をまとめている。
- (3) 簗島栄紀『古代国家と北方社会』(吉川弘文館、二〇〇一年十二月)、ことに本稿と密接に関わるのは第三編第三章「津軽蝦夷の特質と交流」の部分である。
- (4) 『日本書紀』齐明天皇元年七月己卯条。
- (5) 『日本書紀』齐明天皇四年四月条。
- (6) 『日本書紀』齐明天皇四年七月甲申条。
- (7) 拙稿「八・九世紀における陸奥・出羽国域と北方管轄についての覚書」(『市史研究あおり』五、二〇〇二年三月)。
- (8) この記事からみる限りでは、弘仁五年(八一四)段階の津軽エミシは、弘仁二年(八一)における爾薩体村や閉伊村のように反乱勢力として名指しされているわけではない。警戒を必要とするものの、すぐに討伐対象とされるような存在ではなかったと考えてよいだろう。
- (9) 熊田亮介「元慶の乱関係史料の再検討」(『新潟大学教育学部紀要』二七一二、人文・社会科学編、一九八六年三月)、同「賊氣已衰」(『日本歴史』四六五、一九八七年二月)、同「元慶の乱」覚え書き」(新野直吉・諸戸立雄両教授退官記念会編『秋田地方史の展開』みしま書房、一九九一年二月)。
- (10) 簗島栄紀前掲註(3) 著書。なお、工藤清泰「蝦夷人の往来」(石井進編集協力『ものがたり 日本列島に生きた人たち』10景観、岩波書店、二〇〇〇年五月)で、工藤氏は商人的存在でもある宗教者の存在を想定しているが、あるいは簗島氏のいう台頭した階層と共通する性格を持つ部分もあるかもしれない。
- (11) 熊田亮介「賊氣已衰」(前掲註(9))。
- (12) 拙稿前掲註(7) 論文。
- (13) 『藤原保則伝』に、「此国、民夷雑居、田地膏腴。」と記されている。
- (14) 高橋崇「古代東北と櫛戸」、吉川弘文館、一九九六年七月。
- (15) 新野直吉「元慶の乱」(『秋大史学』一五、一九六八年三月)。
- (16) 簗島栄紀前掲註(3) 著書。
- (17) 『日本後紀』弘仁二年(八一) 三月甲寅条。
- (18) 『日本後紀』弘仁二年(八一) 十二月甲戌条によれば、閉伊村征討の功績によって文室綿麻呂らに叙位が行われており、これは、『日本後紀』同年十月甲戌条に見える「今月五日奏状」で報告された戦果と考えられる。
- (19) 『日本後紀』弘仁二年(八一) 十月甲戌条。
- (20) 今泉隆雄「秋田城の初歩的考察」(虎尾俊哉編『律令国家の地方支配』、吉川弘文館、一九九五年七月)、鈴木拓也『古代東北の支配構造』(吉川弘文館、一九九八年三月)。
- (21) 拙稿前掲註(7) 論文。
- (22) 大走須恵器窯跡発掘調査団・五所川原市教育委員会編『大走須恵器窯跡発掘調査報告書』(五所川原市教育委員会、一九九八年十月)。工藤清泰前掲註(10) 論文。

(かねがえ・ひろゆき 弘前大学人文学部助教授)